四、『日書』

ここでは、睡虎地秦墓や放馬灘秦墓から出土した『日書』に見える五行説について取り上げる(1)。

伝世文献に見える日者の言説

『日書』とは占いの書であり、択日を中心として、様々な占術が記されている。こういった占いを行う者たちを「日者」と謂い、『史記』巻一百二十九には日者列伝も設けられている(2)。『史記』日者列伝に先秦期の日者の伝記は記録されていないが、『墨子』貴義に日者と墨子との会話が掲載されており、戦国期に活躍した日者の言説の一片を窺える。

子墨子北之齊、遇日者。日者曰、帝以今日殺黒龍於北方。而先生之色黒、不可以北。子墨子不聽、遂北、至淄水、不遂而反焉。日者曰、我謂先生不可以北。子墨子曰、南之人不得北、北之人不得南、其色有黒者、有白者、何故皆不遂也。且帝以甲乙殺青龍於東方、以丙丁殺赤龍於南方、以庚辛殺白龍於西方、以壬癸殺黒龍於北方。若用子之言、則是禁天下之行者也。是圍心而虚天下也。子之言、不可用也。

墨子が北の方角の斉まで行こうとしたところ日者に出くわした。日者は、「帝が今日は黒龍を北方で殺す。先生の色は黒く、北へ行ってはなりません」と言った。墨子は聴き入れず、結局北に行って淄水までは着いたが、目的は遂げずに帰って来た。日者は、「私は先生に『北へ行ってはなりません』と申し上げましたのに」と言った。そこで、墨子は次のように述べた。「それでは、南の人は北へ行けず、北の人は南へ行けなくなります。黒い色の者もいれば、白い色の者もおります。どうして、みながみな目的を遂げられないことになってしまうのでしょうか。また、帝は甲乙の日に青龍を東方で殺し、丙丁の日に赤龍を南方で殺し、庚辛の日に白龍を西方で殺し、壬癸の日に黒龍を北方で殺します。もしあなたの言う通りにしていたら、天下全ての者の通行を禁じることになってしまうでしょう。これは人々の思いに逆らい、天下をないがしろにすることです。だから、あなたの言う通りにはできません」

この逸話から、日者たちの間で日付と色と方角とを関連付ける占法が行われていたことが分かる。その組み合わせは、次の通りである。

- 甲乙――青――東
- 丙丁――赤――南
- 庚辛――白――西
- 壬癸――黒――北

同様の例が『左伝』昭公十七年の条に見え、壬を水に、丙を火に対応させた占辞が、梓慎によって述べられている。また、昭公三十一年では、史墨によって庚を金に、午を火に当てた占辞が述べられている。これら『左伝』の場合は、更にそれらの間で「水、火之牡也」「火勝金」といった、相勝と考えられる関係が見える(第一節参照)。

これらの文献が成立したと考えられる戦国中期までに、日干・色・方位を関連付け、更には「牡」「妃」といった相克を利用した占術までもが考え出

されていたことが分かるだろう。ただし、第一節で述べたように、五行相勝が完備して述べられる例は無く、特に「土」や「戊」「己」についてどのように考えられていたかについては、不明である(3)。

五行相勝説

一方、時代が下って戦国晩期、すなわち鄒衍の活躍した時期よりやや後の頃には、五行全ての相勝関係が盛んに説かれていたことが確実である。睡虎地秦墓より出土した二種の竹簡『日書』は、前三世紀中頃に成立したと考えられ(4)、そこには五行相勝説が完備している。以下、順に甲種第八十三簡背面参-第九十一簡背面参・第九十二簡背面弐、乙種第七十九簡弐-第八十七簡弐である。

金勝木、火勝金、水勝火、土勝水、木勝土。東方木、南方火、西方金、北方水、中央土。

金は木に勝ち、火は金に勝ち、水は火に勝ち、土は水に勝ち、木は土に勝つ。東方は木、南方は火、西方は金、北方は水、中央は土である。

丙丁火、二勝金。戊己土、二勝水。庚辛金、二勝木。壬癸水、二勝火。丑巳金、二勝木。未亥□□□勝土。辰申子水、二勝火。

丙丁は火であり、火は金に勝つ。戊己は土であり、土は水に勝つ。庚辛は金であり、金は木に勝つ。壬癸は水であり、水は火に勝つ。丑巳は金であり、金は木に勝つ。未亥□は□であり、□は土に勝つ。辰申子は水であり、水は火に勝つ。

まず甲種の引文では、五行全ての相勝関係と共に、方角と五行との対応が述べられている。また、乙種では、十干と五行との対応と、五行の相勝が見え(5)、続けて十二支に於ける三合が説かれている(6)。

ここには具体的な占いが付せられていないので、相勝の論理を当時如何にして用いたかは不明である(7)。おそらくは、日付の選択や方位の吉凶といった事柄についての占いに用いたのであろう。

五行相生説

五行相勝のみならず、五行相生も秦簡『日書』に見出されるという説がある。ただし、結論から言えば、これは疑問である。以下、この問題について簡単に論じる。

饒宗頤「秦簡中的五行説与納音説」(8)は、睡虎地秦簡『日書』乙種「夢」に、五行相生説に基づいた記述があるという。以下、該当箇所(第一八八簡壱-第一九三簡壱)を引く。

甲乙夢被黒裘衣冠、喜、入水中及谷、得也。丙丁夢□、喜也、木金得也。戊己夢黒、吉、得、喜也。庚辛夢青黒、喜也、木水得也。壬癸夢日(9)、喜也、金得也。

甲乙の日に黒い裘を着て冠をかぶっている夢を見たら、喜ばしい。水中や谷に入るのが、「得」である。丙丁の日に□を夢で見たら、喜ばしい。木・金が「得」である。戊己の日に黒いものを夢で見たら、吉であり、「得」であり、喜ばしい。庚辛の日に青・黒を夢で見たら、木・水が「得」である。壬癸の日に白いものを夢で見たら、喜ばしく、金が「得」である。

饒氏によれば、甲乙（木）の日に黒（水）を夢で見るのは、「水生木」の相生関係であるので「得」。庚辛の日に青（木）と黒（水）を夢で見るのは、「火生木」（饒氏の書き誤りであろう。恐らくは「水生木」の意）によって「得」。壬癸（水）の日に「日(白)」（金）を夢で見たら、「金生水」により「喜」であると解釈される。

しかし、「甲乙――黒」「壬癸――白」は一応共通の関係とも考えることができるが（ただし、これも「日」を「白」に改めることによって可能となる）、「戊己――黒」や「庚辛――青・黒」とは一貫していない。かつ、そもそも「甲乙――黒」「壬癸――白」自体も、それが「相生」という関係を念頭に置いた上で立てられた説と断定することはできない。それがたまたま後人にとっての五行相生説と合致したに過ぎないだろう。

また、放馬灘秦墓出土竹簡『日書』に、五行の相生関係を明言した字句が見えるという説がある。左に、その画像を掲げる。

甘粛省文物考古研究所『天水放馬灘秦簡』
（中華書局、二〇〇九年）より『日書』乙種第七十七簡下段

甘粛省文物考古研究所『天水放馬灘秦簡』の釈文はこれを「水生木、木生火、火生土」と読み、この字句を含む段を「五行相生及三合局」と名づける。すなわち、五行相生説と考えている。

しかしこの写真を見ると、明らかに「土生木、木生火、火生土」と書かれている。思うに、土から草木が生え、草木に火が燃え、燃えた後に土が残るという、土・木・火三者の循環を示すのではなかろうか。少なくとも、この「土生木」を「水生木」と読んで、戦国晩期から五行相生説が存在したと主張することには、無理があるだろう。

……

以上の通り、秦簡『日書』には五行相勝説が完備された形で見えるが、五行相生説の明文は見えない。五行相勝説の完成自体が鄒衍の手に成るのか否かは不明ながら、戦国晩期に相勝説がある程度流行していたことは明らかであり、それが鄒氏やその後学たちの影響である可能性も考えられる。一方で、五行相生を見出すことは難しく、現在のところ、相生説の整備は漢代になってからと考えるのが無難であろう。